

中西伊之助と朝鮮文壇

朝鮮プロレタリア芸術同盟の結成と関連して

NAKANISHI INOSUKE AND THE KOREAN LITERARY WORLD

Connections with the Formation

of the Korean Proletarian Arts Alliance

吳 皇 禪*

The literary work of Nakanishi Inosuke, who lived for a long period in Korea as a first-generation colonist, is important in that it fills the space in the image of Korea and Koreans in modern Japanese literary history.

Nakanishi Inosuke, who is little known in Japanese literary history as the author of the novel *Planted in the Red Earth* and member of The Sowers and *Front Line of the Arts* groups, led a stormy life as a proletarian writer and participant in social movements. His position in the literary world is not that of a writer of laborer literature nor that of the proletarian writer but rather that of a “fourth social class writer” according to Moriyama Shigeo. The intimate relations between Nakanishi and Korea can be inferred from his interchanges with Korean literary figures and a series of works using Korean materials. The love which he felt for the lowest segments of society was his very

*OH Hwang-Sun 明治大学大学院博士課程。

foundation and he depicted colonial Korea with realism particularly in the novels which are staged in the Korea of the 1910's, *Planted in the Red Earth*, *The Insubordinate Korean*, and *From Behind You*.

In this paper I would like to examine three aspects of the relationship between Nakanishi Inosuke and the Korean literary world.

1. The reception of Nakanishi Inosuke's literary works which use Korean materials.

2. The details and circumstances relating to Nakanishi Inosuke's participation in "The Great Lecture Gathering on Thought" which was held in Korea in August of 1925.

3. The process and significance of the welcoming round-table talks for Nakanishi Inosuke on August 17, 1925, which turned out to be a preparatory conference for the historic "Korean Proletarian Arts Alliance."

While making public documents which I discovered in Korea and Japan and with the above sense of the problem, I would like to report on the interchanges between Nakanishi and Korean literary figures which have not been clarified in the research carried out up to now.

— はじめに

中西伊之助がプロレタリア作家として初めて文壇に頭角を表したのは、1922年、日本政府による武断統治下の朝鮮を描いた小説『赭土に芽ぐむもの』を発表したことによる。中西は、『種蒔く人』と『文芸戦線』の同人として活躍しながら自らの朝鮮体験をもとに「光明と沈滞した暗黒が同居する」朝鮮を書き

続ける。特に、1910年代の朝鮮を舞台とした小説『緒土に芽ぐむもの』、『汝等の背後より』、『不逞鮮人』においては最底辺に生きる民衆への人間愛を基底とし、植民地朝鮮をリアルに描出している。このような文学的傾向から朝鮮文学者との交流を行うなど中西は、朝鮮ともっとも密接な関係をもっていた文学者の一人である。

中西の文壇的位置は、大正初期の労働文学の作家でもなく、また昭和初期の“マルクス主義”文学運動に主導されたプロレタリア文学作家でもないちょうどその中間の「第四階級の作家」^①として位置づけられる。しかし、中西伊之助の名は今日の我々にはあまり知られていない。それは、近代日本文学史における朝鮮及び朝鮮人像の記述の空白とも関係があるだろう。

本稿においては、いままでの研究では明らかにされていなかった中西伊之助と朝鮮文壇との交流について探りたいと思う。まず最初に、中西伊之助の朝鮮題材文学の内容とそれに対する朝鮮文壇での反応を検討してみたい。それから又、1925年8月、朝鮮で開かれた「思想大講演会」への中西伊之助の参加経緯とその実状、そして1925年8月17日、中西伊之助の歓迎座談会が歴史的な「朝鮮プロレタリア芸術同盟」の準備集会となった過程とその意義を検討することを通して、中西伊之助と朝鮮文壇との関係について、考察を試みたい。

二 朝鮮題材の文学と朝鮮文壇での反応

1909年頃、植民者一世として朝鮮へ渡った中西伊之助の朝鮮体験は、大きく二段階に分けて考えることができる。一つは、「三・一独立運動」以前、日本の植民地政策の強化と朝鮮の没落が対照的に表れる「武断統治」期における朝鮮体験であり、もう一つは、「三・一独立運動」以後、朝鮮人の意識成長と社会活動の拡大していく過程における朝鮮体験である。

日韓併合以後、4、5年間、朝鮮の平壤で現地の新聞記者をしていた中西は、虐げられている日本人労働者や朝鮮人の惨状を目撃し、また1919年には「三・一独立運動」を経験する。

「平壤日々新聞」の記者となった中西は、寺内総督の政策を攻撃し、大資本家藤田伝三郎の鉾山における労働者虐待を暴露して、「信用毀損罪」して投獄される。彼は、監獄という非社会的な場所で日本政府支配下の多くの朝鮮人と接し、その惨憺たる状況を実感した。『緒土に芽ぐむもの』の金基鎬や『汝等の背後より』の金成俊という人物は、その中から創り出されたのである。

中西の最初の長編小説『緒土に芽ぐむもの』（「改造社」・1922年2月10日）は、日韓併合後、日本政府の「土地収奪」による朝鮮転落農民金基鎬の悲劇と、「移民事業」による日本労働者の惨状を日本人主人公榎島久吉を中心に描いた作品である。

勤勉な自作農夫であった金基鎬は、「土地収用」によって強制的に土地を手放してしまい、そのうえ妻の病死、息子金成俊の監獄送りといった不幸が続く。すべてを失い暗闇の中にいた金基鎬は、日本人が経営する飲み屋で働く若い未亡人の李召史に近づくが、日本人経営者に金だけ全部まきあげられる。絶望的に追いつめられた金基鎬は、不意に李召史とその子供を殺してしまう。先祖伝来の土地を奪われたうえ、日本人から屈辱まで受けて、突破口を見出しかねて惑乱した金基鎬は、同族のもっとも弱い女性を相手に破滅的な行動に出てしまったのである。外部の抑圧に対する反逆が、内部の同族の犠牲において果たされねばならなかったような転落した金基鎬の姿は、植民地下朝鮮民族の深刻な悲劇を表している。

一方、作者の分身として描かれた榎島久吉は、不景気に追いまくられた日本の労働者、農民、小商人たちと共に、一攫千金を夢見、あるいは、生計のために朝鮮に渡る。が、榎島は、現地の忠実な新聞記者となる。ある日、一人の労働者の投書からS炭坑の惨状を知り、その調査に出かけた榎島は、新聞探訪の域をこえ、S炭坑の闘争の組織化へ動こうとした。炭坑の調査記事を新聞社説に載せると、炭坑経営者は彼を「名誉損害毀損」の罪で監獄に送る。その監獄で榎島は、金基鎬と出会う。榎島は、朝鮮人に対する感情が囚人になってから根本的に変わったことを意識する。同じ虐げられている者同志としての人間性

の発見であり、「人類愛の共感」ともいえる。そして、檳島は、「強い民族的な自責の念」を禁ずることができなかったのである。

朝鮮文学者の金基鎮は、『楮土に芽ぐむもの』に大いに刺激を受け、「自分は、朝鮮人でありながら朝鮮の現実を日本人よりも正確に把握していないこと」に気がついたといい、「自国民を見る目が日本人よりも確かでないとははずべき」であるとその感想を述べている。^② 金基鎮が、自分よりも朝鮮の現実をよく把握していると激賞するほど、中西は、被征服民でありながら征服民の内面に入り込んで、その痛ましい姿の描写を完成させているのである。

『楮土に芽ぐむもの』において抵抗することさえ出来ず、無力に没落していく朝鮮農民を描いた中西伊之助は、日本帝国主義と闘う新しい世代の朝鮮人、国内外の朝鮮独立運動家たちを見逃すことなく、彼らの独立運動の様相を長編小説『汝等の背後より』（「改造社」・1923年2月13日）の中で展開していく。

辺境の雪原で日本人警官が狙撃され、ストーリーの緊張感が造成されていく『汝等の背後より』は、朝鮮の国境地帯を舞台に、所謂「不逞鮮人団」と呼ばれていた「秘密結社」の一群を取り扱った、日本文学史の中ではほぼ唯一の、扱われたことのなかった特異な作品である。

物語は、『楮土に芽ぐむもの』の金基鎮の息子、金成俊の出獄してからのことと、併合当時、平壤道庁へ爆弾を投げ込んだ若い朝鮮婦人をモデルとした権朱英を中心に展開する。

国境で日本人巡査を殺してS州に入り込んだ三人（権朱英、趙盛植、申春容）の新しい思想をもった朝鮮独立革命運動家たちは、30年以上長い歴史をもっている天主教教会に隠れて過ごすことになった。そこでトマス神父から信仰の強さと殉教者の精神、伝道者の精神などを教わりながら時を待つ。一方、7年間の獄苦を終え、教会の小使として働きながらトマス神父とキリスト信仰を勉強していた金成俊は、この革命家たち——中でも特に権朱英に会ってしだいに革命家としての思想を育てていく。その間に、50年前の1866年の天主教弾圧、金成俊の監獄での生活、権朱英の過去などが挿入される。ついに日本人警部に発

見されると、若い革命家を逃して権朱英と申春容は崖に投身し、自殺してしまう。

『汝等の背後より』には、朝鮮独立運動家たちの思想と内面の葛藤が、思想、宗教、愛欲の絡み合ったかたちで描かれている。女性をめぐる男たちの醜悪な性的争い、それによって思想と同志に背く趙盛植と、それを越えて思想を貫く申春容、信仰と性欲に苦しむ金成俊。彼らは、思想的・人格的に優れた英雄的な人物ではなく、祖国の独立と個人的欲望の間で常に葛藤し、悩む平凡な人間として描かれている。これは、運動家としての中西の革命運動過程における内部的対立・反目に対する批判の反映であろう。また同時に革命家以前の人間性というものに注目していることの表れであろうと考えられる。

夜を徹して『汝等の背後より』を読んだという金基鎮は、「“朝鮮の人々みんなにこの小説を読ませよ” 私はこう思うほど、この小説に感激した」と述べている。^③ 日本 の 憲兵警察と朝鮮独立運動家との対決と追跡が描かれ、革命のためには命さえ惜しまぬ人物たちを登場させた『汝等の背後より』は、当時の朝鮮人読者たちに充分感激させたのであり、刺激をあたえたのであろう。なお、『汝等の背後より』は、1929年朝鮮で、「解放社」から文学者の李益相によって翻訳出版された。

一方、「三・一独立運動」の当時朝鮮の平壤にいた中西は、武器なき朝鮮民衆が命をかけて独立を叫びながら日本政府に対抗する姿と、そういう朝鮮民衆を無残に虐殺する日本人鎮圧隊を目撃する。「三・一独立運動」の経験は、朝鮮民族の底力の発見であり、「怕ろしき民族」の印象を受けたのであった。それと同時に、圧迫民族としての民族的罪悪感を思わざるを得なかったと思われる。このような経験は、小説「不逞鮮人」によく表れているが、中西の半生を通して問われる民族の問題として残るのである。

中編小説「不逞鮮人」（『改造』・1922年9月）は、民族の独立を叫んでいた美しい少女の虐殺を目撃し、それを題材として描いた作品である。日本近代文学の中で、植民地下朝鮮の「三・一独立運動」を同時代に作品化したものとし

てその意義は大きいと思われる。

「不逞鮮人」は、自称世界主義者である碓井栄策が、「不逞鮮人」と「心から語って見たいといふヒロイック」な気持ちと、「毒汁の吐き場を探しに行くような」必死の覚悟で、朝鮮の西北部の「不逞鮮人」の巢窟を訪れる物語で、その過程における主人公の意識の動きを描いた作品である。

栄策は、夜、自分たちの荷物を調べに忍び入った主人を目撃し、絶望と息窒るような恐怖感にとらわれて「仇敵たる日本人の片われ」を殺そうとしているのだと疑う。翌日、それは自分の誤解であって、主人が栄策の武器携帯の有無を調べたのであったことがわかり、「すべては自分達民族の負うべき罪だ」と痛感する。森山重雄は、「この一場の夢魔と誤解とを、『民族の負うべき罪』のあらわれである」と言い、小説「不逞鮮人」は、「日朝間の心理のコンプレックスを突いている」と語っている。^④

さらに、この小説には朝鮮における二つの世代の存在を暗示しようとしている。「朝鮮の伝統を重んじ、その伝統に根ざした民族的自由」を求める旧世代と「人類の全的な解放を望むという最終的目標は同一であっても、その思想と戦略の面において、お互いに異なる意見をもっていたのである。朝鮮の若い世代の社会革命家たちと思想を共にしていた栄策は、この老主人との邂逅においてその人間的魅力にひきつけられ、伝統的なもののもつ美しさと力を見出している。ここには、作者自身、世界解放においても日本の解放においてもその国の伝統を度外視しない立場を取ってきたことがしめされている。

以上、1910年代の朝鮮を描いた三つの作品を見てきたが、このような中西の文学的傾向に、朝鮮の文学者たちは共感をもっていたのであり、親密感を感じていただろう。前述した金基鎮は、日本留学中、中西の小説を読んでいて次のように回想を述べている。

懐月（朴英熙）が東京での学業を中断、1992年の春一足先に帰国した後のことである。その頃は、日本で社会主義の思想が膨張し始まる時で、労働組合運動が白熱化し『種蒔く人』という雑誌にロマン・ローランとアン

リ・バルビュスの四回にわたる論争文が翻訳・発表された。それを読んで私は、バルビュスの立場を選んだ。バルビュスの『クラルテ』と『地獄』を読んで、彼に共鳴した。また当時、中西伊之助の小説、『汝等の背後より』と『赭土に芽ぐむもの』に大いに刺激を受けたのも事実だ。^⑤

また、1925年8月16日の『朝鮮日報』に掲載された、ある匿名人士（RH氏）の「中西氏を迎える」という文章をみると、中西が朝鮮文人の間にどういうふうに知られているか、評価されているかがうかがわれる。それには、「氏の作品だけを見ても、氏がどんなに朝鮮と親しい同志であるかがわかる」と述べられ、「土地調査事業」の実相を暴露した『赭土に芽ぐむもの』、日本政府の武断統治に反抗し命をかけて闘おうとする「秘密結社」の一群を描いた『汝等の背後より』、「三・一独立運動」と朝鮮独立運動家を題材とした「不逞鮮人」の三編を挙げている。これらの作品は、「光明と沈滞した暗黒が同居する朝鮮の両面」を見せており、「朝鮮魂の告白であり、虐げられている朝鮮の代弁の記録」であると書かれてある。

以上のように中西の作品は、金基鎮をはじめ当時の朝鮮文学者たちに、大きな感激と影響を与えていたのである。

三 「思想大講演会」への参加経緯とその実状

中西伊之助の第二の朝鮮体験は、「三・一独立運動」以後、社会主義理念の影響による社会活動の拡大過程のなかでなされるが、その間朝鮮文壇史にも残る事件が「思想大講演会」への参加である。

文学的傾向から朝鮮文学者たちに親しまれていた中西は、1925年8月、朝鮮の文学団体の一つである「焰群社」の構成員を中心とした朝鮮文学青年たちに招待され、「思想大講演会」へ参加することになる。

中西と朝鮮文学界との交流は、今までの研究では明らかにされていなかった。中西が、「思想大講演会」に参加し、朝鮮文学界と係わりをもち、朝鮮の文学者たちに影響を与え、また影響されたことはしられていても^⑥、その経緯、内

容などは明らかになっていない。このような問題は、中西だけではなく、プロレタリア文学活動における日朝交流の歴史が、ほとんど明らかにされていない事情に関係していると思われる。しかし、中西の場合は、朝鮮プロレタリア文学者たちともっとも深く関係していて、韓国のプロレタリア文学史においてもその名は取り上げられている。権寧珉『韓民族文学論研究』（民音社・1988年）はその代表的例として、「朝鮮プロレタリア芸術同盟」の組織過程とその背景を語る際、中西の役割が詳しく述べられている。この問題に関しては、上記の研究書を参考にして考えたい。

中西と朝鮮文学界との関係を語るまえに、まず、その背景となる当時の朝鮮の文芸思潮と文壇の動向を見てみよう。

1920年代半ば頃から朝鮮文壇に、新しい文学の傾向が日本を通して入ってきた。1924年頃まで文壇を支配していた自然主義・浪漫主義に対立的意見を示した、金基鎮の「今日の文学、明日の文学」や朴英熙の「新理想主義の文学」などの“新傾向派”の文学である。“新傾向派”の作品は、社会に対する貧窮層の反抗心を取扱い、殺人、自殺、放火などを描いている。主人公たちは、敵愾心、憤怒、反逆、絶望をこめてそれを既存秩序に対する反抗の手段とするのである。これらはまだ階級意識のない漠然とした貧窮と反抗の文学であったといえる。

そうした中で、1920年代初期に共産主義運動がソビエトから朝鮮に入り、1925年には「朝鮮プロレタリア芸術同盟」（Korea Proleta Artista Federatio—以下カップ）が結成され、ようやく階級意識をもった階級闘争の手段としてのプロレタリア文学が出現する。「カップ」の結成は、「焰群社」と「PASKULA」の統合によってなされた。

「焰群社」は、1922年9月、李赤暁、宋影、沈薫、崔承一、金永八、李浩によって組織された最初の社会主義文化団体である。「焰群社」の組織は、社会思想運動に基づいた文壇志望者たちが、文化の領域へその活動方向を拡大しようとする試みであったと言える。一方、「PASKULA」は、金基鎮、朴英熙、

李益相、金炯元等、既成文人たちの親睦団体である。この二つの団体の結束によって、イデオロギーと文学が結び付いた文学運動団体「カップ」が誕生するが、構成員と団体の性格が異なっていた「焰群社」と「PASKULA」統合の具体的契機となったのが中西伊之助の訪朝——「思想大講演会」への参加であった。

1925年8月15日、朝鮮の「火曜会」・「朝鮮労働党」・「無産者同盟」・「北風会」の四団体連合の取り持ちで、中西伊之助と奥ムメオ女史が招かれ、京城で「思想大講演会」が開かれた。15日、日本警官の監視の下で中西は、「唯物史観に表れた文芸」という演題で「人類の原始的な生活から文明時期に至るまでの唯物論」を説明し、朝鮮文芸の中心である「春香伝」について語った。ところが、16日、中西が「人間礼讃」というタイトルで講演する際、日本国粋会朝鮮支部一派と衝突し、場内は大混乱となり、講演は、中止となった。その時の模様を『東亜日報』は、次のように記している。

聴衆の中から、日本国粋会朝鮮支部の幹事である分島週次郎が立ち上がり、「中西！この野郎！下りてこい」と叫びながら演壇に上がろうとするのを群衆が止めた。国粋派の一派と主催者の間でちょっとした衝突もあった。三百余名が集まった場内は重苦しい空気となった。警官は講演を中止させた。国粋派の支部員たちは、刀を身に付けてきたという。^⑦

そして、17日、第三回目の講演を鐘路青年会講堂で開催する予定だったが、鐘路署が、前日の国粋派との衝突を理由に講演を禁止したので中止となる。そこで、朝鮮プロレタリア文学者たちは、17日の夜、中西を招待し、告別の意味で茶話会を開催したのである。

四 「朝鮮プロレタリア芸術同盟」の結成と関連して

それでは、中西の「思想大講演会」への参加が、「焰群社」と「PASKULA」統合の具体的契機となったとは、どういうことなのか、まず、朴英熙と宋影の記述から見ていきたい。

折りよく、日本から社会主義者であり、プロレタリア作家として知られていた中西伊之助氏が朝鮮を訪れた。ソウルの思想団体は氏の歓迎の準備に忙しかった。文学界でも何か準備をすべきであったが、まだ、文学団体が結成されていなかったのも個人個人が一晩集まって、中西氏を中心に座談会でも太西館で夕食を食べたことがある。^⑧

上の朴英熙の回顧文から見て、中西の訪朝の当時は、まだ文学団体が結成されていなかったこと、すなわち、「焰群社」と「PASKULA」の統合がまだなされていなかったことがわかる。一方、宋影は、次のように回想している。

ついに、二系の若い芸術家たちは、力を合わせて一つの主体を創建させた。二つのグループの同人が発起人となって創立したいわゆる、朝鮮プロレタリア芸術同盟がそれである。時は、今から20年前の1925年8月23日であった。その時、「北風会」か、「労総」の招待で「汝等の背後より」の作家中西伊之助氏が来て、その大会の傍聴者となっていた。その一年後、日本でプロ芸術連盟が設立された。^⑨

宋影の記述からわかるように、中西の「思想大講演会」への参加後、「カップ」が結成されたのであり、中西は、設立大会にも加わっていたのである。彼自身、このことについて「朝鮮解放運動概観」の中で次のように語っている。

昨年、筆者が渡朝した際、旧焰群社同人その他の同志で新しくプロレタリア芸術同盟が組織された。朴英熙、朴容大、沈大しよう、李益相、李浩君その他の諸君の熱心な運動が開始された。が、猛烈な当局の圧迫があつて——朝鮮官憲当局では、文芸運動を非常に恐れている——、十分な活動ができないが、将来の希望は洋々である。諸君の勇躍が望ましい。^⑩

互いに異なる性格をもって、各自の路線を歩いていた「焰群社」と「PASKULA」は、階級文学に対する認識の拡大と文壇的地位の確保、社会主義運動の変化に伴う階級文壇の組織化の要求といった現実的要件と、中西訪朝の歓迎のための合同集会が直接的なきっかけとなって、「カップ」を出現させたのである。

以上の如く中西伊之助の訪朝と深く関係していた「カップ」は、雑誌『文芸運動』の刊行によって、実践的基盤が確立される。1925年5月に刊行された『文芸運動』は、理念的傾向が強く、階級文学の組織的結束を要求する姿勢をみせている。その二号には、中西の評論「新しい民族文学の樹立」^⑩がのせられる。この論文で彼は、「民族のもっている芸術が、その民族の独立性を養育する」と言い、「芸術をもった民族は永遠に滅びることはない」と確信をもって述べている。

その他、中西の朝鮮文壇との係わりは、インドの独立を扱った長編小説『熱風』の連載である。作品は、李益相の訳で『朝鮮日報』に、1926年2月3日から1926年12月21日まで連載された。

五 まとめ

以上、中西伊之助と朝鮮文学界との交流をみてきたが、その役割はかなり大きかったものであり、その関係も深かったことがあきらかになったと思われる。この事実はまた、中西自身にも大きな影響を与え、彼の朝鮮認識を深めることとなった。朝鮮文学界との交流の中で得た知識を基に書いた評論「朝鮮解放運動概観」（『社会問題講座』・1926年8月）は、厳しい検閲と制限された情報の中でも植民地朝鮮を正確に認識している。また、1931年7月4日、「萬寶山事件」が起きた時には、評論「萬寶山事件と鮮農」（『中央公論』・1931年8月）、「満州に漂泊ふ朝鮮人」（『改造』・1931年8月）を書き、事件の根本的原因を取り上げ、その背景が日本帝国主義の朝鮮支配にある点を暴露するなど、日本政府の植民地政策の矛盾と非理を真正面から指摘・批判しているのである。

中西と朝鮮文人との交流がなされた要因の一つは、前述したように当時朝鮮の社会運動家たちが、中西の文学的傾向から彼を階級運動の同志だと考えており、彼の文学に共感していたことが挙げられる。もう一つの要因は、無産階級の国際主義的連帯を強調していた「焰群社」構成員は、日本の無産階級との有機的連帯の強化を目標としていたので、中西に対する関心が高かったこと

が挙げられる。言い換えれば日本の社会主義運動家と朝鮮の無産大衆が団結して、朝鮮の解放を実らせようとした「焰群社」側の積極的な姿勢があったのである。

1920年代朝鮮文壇において社会主義文学運動を主導した文学者と中西とのつながりは、個人的次元の問題でなく、朝鮮社会運動史の展開過程とかみあう歴史的な意味をもっていたということがいえる。そして、朝鮮プロ文壇と日本のプロ文壇との間で、プロレタリア国際主義の原則に基づく組織的な連帯の可能性も存在していたと考えられる。しかし、中西伊之助は、日本人と朝鮮人との交流をいかに深めるかなどの具体的方策は提起しなかった。それは、当時の中西伊之助の限界であったが、この問題は、昭和期のマルクス主義文学者たちと「カップ」との関係という問題としてさらに追求せねばならない。

注

- ① 森山重雄・『一序説転換期の文学』・三一書房・1974年
- ② 金基鎮・『片々夜話』・『金八峰文学全集Ⅱ』・文学と知性社・1988年8月
- ③ 金基鎮・『我が文学青年時代』・『金八峰文学全集Ⅱ』・文学と知性社・1988年8月
- ④ 注①に同じ
- ⑤ 金基鎮・『我が回顧録』・『金八峰文学全集Ⅱ』・文学と知性社・1988年8月
- ⑥ 高柳俊男・『中西伊之助と朝鮮』・『三千里』29号・1982年参照
- ⑦ 『東亞日報』・1925年8月15日（筆者翻訳）
- ⑧ 朴英熙・『草創期文壇側面史四』・『現代文学』・1959年12月
権寧珉・『韓国民族文学論研究』・民音社・1988年9月所収
- ⑨ 宋影・『朝鮮プロレタリア運動小史』・『芸術運動』一号・1945年12月
権寧珉・『韓国民族文学論研究』・民音社・1988年9月所収
- ⑩ 中西伊之助・『朝鮮解放運動概観』・『社会問題講座』・1926年8月
- ⑪ 中西伊之助・『新しい民族文学の樹立』・『文芸運動』二号、春季特別号・京城白熱社・1926年5月（韓国語）

討議要旨

キム・レーホ氏から、『楮土に芽ぐむもの』が1934年にロシア語に訳され、国際日本革命作家大会議で高く評価されたことを視野に入れるべきだろうとの意見がだされ、さらに、中西を第四階級の作家と位置づける従来の説に対する疑義が提出された。発表者は、中西の位置づけについては、現代では再考すべきであろうと賛意を表された。